

紹介

越智通敏著『矢野玄道の本教学』

久保 田 収

近世における国学の成立とその発展については、数多くの研究が発表されて、次第に解明されつつあるが、明治維新以後の国学については、国学が維新の成立やその施策に大きく関与してゐるわりには、余り研究が進められてゐない。維新後の国学がどのやうに発展したのか、その中心もしくは主流がどこにあつたのか、それが歴史的にどのやうな意義をもつてゐるのか、など、考へねばならない問題がいろいろあるが、国学が次第に衰微する傾向にあつたことや、明治史がまだ十分研究の対象とならなかつたことから、未開拓のままに残された。戦後、近代史研究がやうやく進められはじめたが、占領以来の政治、社会情勢の影響もあつて、国学や神道に関する研究は等閑に付せられてゐる。この未開拓の分野に鍬を入れたものとして、紹介したいのが、越智通敏氏の新著『矢野玄道の本教学』である。

本書は、副題にあるやうに、矢野玄道について「その生涯と思想」とを説いたものである。著者越智氏は、玄道の出た愛媛県の人であり、多年、玄道の著書を精査し、それを通じて、玄道の思想の中心である「本教学」に焦点をあてて、その学問的意義を追求したものである。

越智通敏著『矢野玄道の本教学』（久保田）

本書は、四章より成る。第一章は、「生涯と学問」であつて、玄道の伝記のあらましと、修めた学問、さらにそれが本教学として形成されていつた状況を明らかにし、さらに、玄道の著作のすべてを紹介し、かつ解説した。第二章は、「経綸」であつて、かうして形成された学問を、国学的理想の実現のために活用して、幕末多端の折に献策したこと、さらには維新後の抱負と活動について述べた。とくに、彼の最も熱望した祭政一致の実現は、理想とかなり隔つたものに過ぎず、玄道の失望は大きいものがあつたが、皇学所が設立されて、その教授職に任じたことや、これはまもなく瓦解し、失意の数年を経て、晩年、修史局や宮内省の御用掛となつて、学問をもつて献替したことを明らかにした。

第三章が、本書の中心課題である「本教学」について説いたものである。玄道の学問は、平田篤胤を承けたものであるが、玄道はそれを基本としつつ、独自の学問体系を確立した。それが本教学であつて、それを玄道の著『本教学柱』『万奈波志良』などによつて解明してゐる。すなはち、内容を造化神説、幽冥思想、神道道德思想に大別して、それぞれについて考察してゐるが、とくに玄道の思想の特色が神道道德思想であることを強調した。その徳目には、敬神、尊皇、愛国、慎しみ、礼儀、道理、誠心などが挙げられてゐるが、この道德思想を整備大成したことによつて、玄道が平田篤胤の神道思想の完成者として評価できる、と説いた。

第四章は、「永生」である。この章は、玄道の終焉と、彼の学問がどのやうな歴史的意義をもつか、それを現代に生かすことが可能か、といふ点を述べた。玄道は、篤胤歿後の門人であるが、同門に

は、すぐれた学問的業績を残し、思想的活動をした人が少くない。佐藤信淵、鈴木重胤、大國隆正などをその代表とするが、それらの中で篤胤学の正統な後継者は誰であるかといふ点になると、いまだ定論はない。著者は、それらのひとびとと玄道について検討を加へて、玄道こそ正統の継承者であると断定してゐる。すなはち、玄道の主著である『神典翼』『皇典翼』について考察し、この方法は篤胤を継承したものであるとし、また玄道の神道思想は、篤胤の造化神説、幽冥思想、神道徳説を全面的に継承発展させたものであると断じ、さらに同門のものが一致して、篤胤の古史伝の統修にあたらせたことなどを、その理由としてゐる。この考察につづいて、玄道の国学史上の地位を考へ、国学者の集大成者とみなしてゐる。その理由として、国学の課題であつた皇学所を設立したこと、信友と考証的学風をうけて、篤胤の逸脱から真淵、宣長の正統に返さうとしたこと、篤胤の主観的独断を除き、古事記中心の伝統に従つたこと、儒、仏両道に対する態度が篤胤より穩健で、国学発展の要素を保持してゐたこと、宗教的傾向が強いこと、四大人の開拓しなかつた国史の分野に成果をもつたこと、国学から得た信念を実行に移したことなどを挙げる。

以上のやうな内容をもつた本書は、乏しい明治国学史の研究に、重要な一石を投じたものであり、玄道の著書を綿密に検討するとともに、国学史上の地位に大胆な論断を下した。この点、問題提起として注目してよい。国学の伝統が古事記中心といへるかどうか、篤胤が国学から逸脱してゐるとみるのが妥当かどうか、篤胤の宗教的傾斜を国学発展の上でどう位置づけるか、などの問題は、さらに解

明せらるべきであり、また重胤や隆正のもつ国学上の位置との比較検討も、今後の課題となであらう。また現代的配慮を意識し過ぎた箇所も二、三はないが、それはともかく、明治国学史は、まだほとんど明らかになつてゐない。明治十五年の皇典講究所や神宮皇学館の設立は、この明治の国学と深いかかはりをもつものであるが、これについても不明のところが多すぎる。玄道研究は、それらについての窓を開く、一つの重要な難である。本書によつて教へられるところ少くなく、また関心をそられたものとして、本書の出現を喜ぶものである。

(B6版、一三三頁、定価六八〇円、錦正社発行)